

もっと知りたい
ふるさと

52

稲荷山の祇園祭と
牛頭天王祇園神輿

○稲荷山の祇園祭の始まり

祇園の神様として現在、治田神社境内に祀られている津島社は、享保18年(1733)に京都祇園社より勧請、治田町旧道南端に鎮座し、厄神宮牛頭天王社と呼ばれた。疫病退散の守護神であり、商売繁盛・家内安全の神ともなった。

明治初期の神仏分離令後は、八坂社とも津島(天王)社ともいわれ、界限は「天王町」と呼ばれた。また、八坂町の地名を記す明治の古地図も残る。

○稲荷山の祇園神輿

天明5年(1785)、京都から「牛頭天王祇園神輿」を迎え、宝蔵に安置。暴れ神輿のため損傷がひどくなった文政8年(1825)に神輿を再調整するが、弘化4年



今年の祇園祭の様子

(1847)、善光寺大地震の際焼失した。なお、現在残る土蔵造りの重厚な商家は、この大地震後、耐火構造を意識して造られた。

○三代目神輿と四神の登場

三代目神輿の完成は、慶応元年(1865)のこと。神輿は飯山村佛壇屋惣左エ門が145両で、神輿渡御の先導役となる四神は、水内郡妻科村の彫刻師儀作が40両で請け負う。また、治田神社境内に神輿殿を50両で造営、神輿渡御のために治田神社参道も拡張したという。諸経費合計260両2分100文、支払いは各町が分担した。なお天王社は、明治41年6月、政府の神仏合祀政策にしたがい、治田神社境内に移されている。大正6年(1917)、治田神社拝殿完成を祝し、東町有志が大獅子を作り、舞を奉納。いまその大獅子が勇獅子となり祇園祭を盛り上げている。

○四神について

古代中国に源流をもつ東西南北の各方位を象徴する霊獣で、五行思想にしたがって東西南北を象徴し、四方それぞれ

れの方角を守護し、悪霊を退け、陰陽の気を順調にめぐらすとされる。東の青龍(緑・春)、西の白虎(白・秋)、南の朱雀(赤・夏)、北の玄武(黒・冬)がおり、中央に黄龍(黄・土用)稲荷山は剣龍で祇園祭以外の日は稲荷山宿蔵し館で展示)を加える。

○近隣に残る牛頭天王の足跡

天王下ろし・天王上げなど祇園行事に登場する牛頭天王とは一体何者だろうか。崇り神が転じて護り神になるように、牛頭天王もまた、恐ろしい疫神・邪神から悪疫を誅する驅疫神・辟邪神となり、素戔鳴男尊・薬師如来などと習合し、祀られている。

上田市信濃国分寺の八日堂縁日で頒布される「蘇民将来符」は、牛頭天王が蘇民将来に与えた厄除け開運の護符である。平成19年(2007)、八幡の東條遺跡から出土した「蘇民将来符」木簡は13、14世紀のもの。表に「蘇民将来子孫人口□」、裏面に陰陽道の魔よけ呪符「☆(五芒星)」が描かれている。信濃国分寺所蔵の古文書「牛頭天王之祭文」



「蘇民将来符」の木簡 (長野県埋蔵文化財センター所蔵)



「縁起掛幅」の牛頭天王

(1480)より古い千曲市出土、県内最古の「蘇民将来符」木簡が「牛頭天王信仰」の足跡をいまに伝える。

また、長野市善光寺淵之坊に伝わる室町時代の「縁起掛幅」第1巻は、右側に阿弥陀如来、左側に牛頭天王および蘇民将来伝説が描かれている。善光寺信仰の功德として、厄疫退散が大きなウエイトを占めていたことをうかがわせる。稲荷山 宮坂勝彦